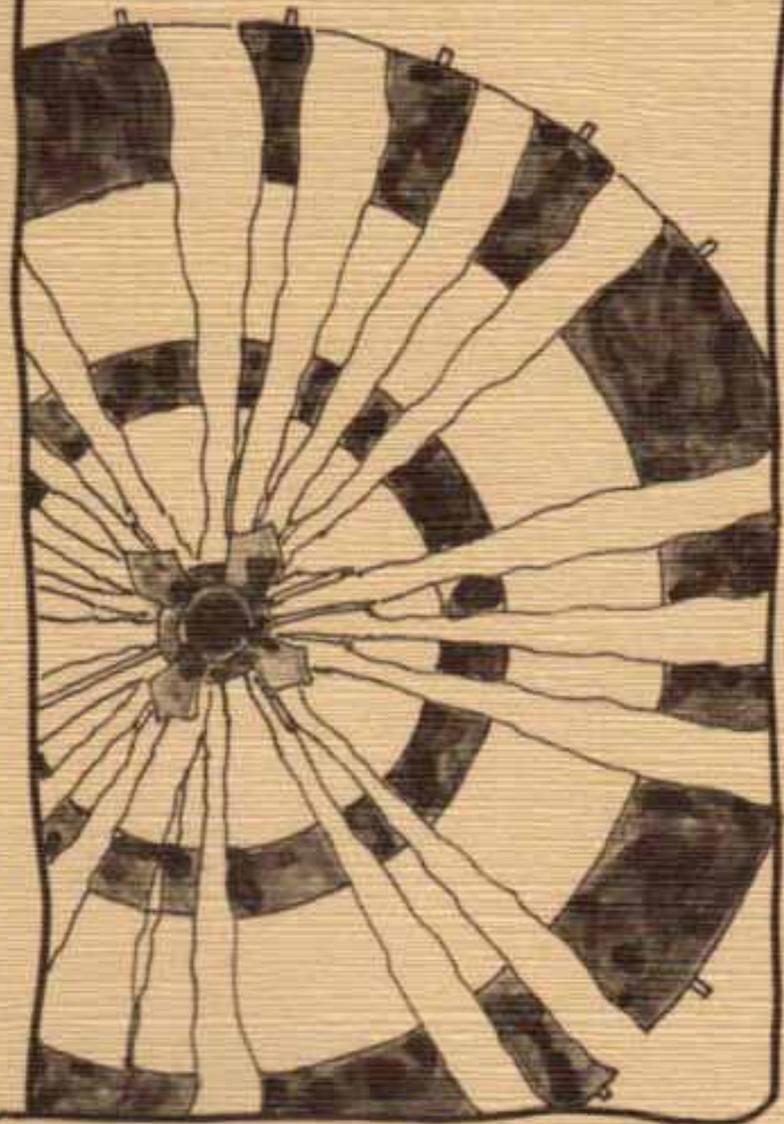


やぶれ傘



一二九号
二〇二二年十二月

文旦の横にはんたん飴の箱 根橋宏次
 花八つ手鴉が屋根に四羽ある きくちきみえ
 実万両かたへに陶の狸ゐて 瀬島酒望
 高橋を上つて下る小六月 丑久保 勲
 竹垣の竹新しき石路の花 廣瀬雅男
 かいつぶり潜ると思ひをればすぐ 大島英昭
 秋深しピーマンに肉ぐいと詰め 青谷小枝
 焼藪を土産にバーの戸を開く 小山よる
 朝冷えの鉄の手すりを撫でてゆく 藤井美晴
 多目的広場にぎはひ冬紅葉 渡邊孝彦
 大根干す日向に墓座を敷きひろげ 白石正躬
 参道に風吹いてゐる七五三 天野美登里
 推敲の一字に迷ひゐる良夜 有賀昌子
 星月夜夜間飛行のあかり見ゆ 安藤久美子
 新米の幟はためく道の駅 秋山信行

抄 集 句 傘 ぶ れ や 大 崎 紀 夫 選

太葱をこんがり焼いて塩ふつて 倉澤節子
 野の墓に野の花供へる秋彼岸 黒澤次郎
 地下足袋の跡新しき冬紅葉 中島和子
 露天風呂のわきを登山者山もみぢ 野口希代志
 腕のびしままの起重機今日の月 萩原溪人
 近きより遠きが美しき冬紅葉 本郷美代子
 日向ほこみんなの歳を足してみる 武藤節子
 掃き寄せて落葉の山の二つ三つ 山本久枝
 軒下に渋柿吊るし終へてお茶 湯本正友
 樽椅子に丸い座布団冬近し 石塚清文
 下北の道折れてまた折れて秋 泉 一九
 渋柿を渋柿のまま友にやり 伊藤 薫
 秋の夜最後の曲のペンライト 江口恵子
 どんぐりの踏めばよるめく程落ちて 奥田温子
 草紅葉真中に道を細く開け 神山市実

秋山信行

塾の子が行くおしろいの花盛り
唐辛子山ほど積まれ韓^{はん}市^し場^{やん}
島はいま小ぬか雨とや^{さわしがき}柿^{かき}
貯水池に水脈をひく舟冬初め
葱束を立たせ八百屋の表口
太葱をこんがり焼いて塩ふつて
大甕に水漲りて冬の月

黒澤次郎

野葡萄の隠すフェンスは錆びだらけ
かなかなが群れ鳴いてゐる道普請
菊芋の花咲く里に朝日さす
行く秋の背びれを見せて泳ぐ鯉
野の墓に野の花供へる秋彼岸
音絶えて形ばかりの鳥威し
すり足で銀杏落葉を踏んでゆく

小泉里香

ひと部屋を廻り出てゆく秋の蠅
きしきしと切る朝寒のフランスパン
木の股に足かけて柿挽いでをり
行く秋の電子レンジに点く灯り
水筒の蓋でお茶飲む紅葉山
どこからか豆煮る匂ひ日向ぼ
木の枝が池につきさう鳩

小巻若菜

秋日傘さして葬儀に急ぎゆく
彼岸花蝶の来てゐる寺の庭
時計台の下に石榴の実が見えて
半券を自ら切つて秋の席
教会に人影の無く銀杏散る
眉月や秩父山並み見えて
さくさくとビスケット噛む夕紅葉

屑籠に壊れた切子塵出す日
 裸木の枝々光る雨上がりに
 飛び去りし啄木鳥穴に羽根残す
 農耕の一休みして秋さやか
 生り年の鈴なりの柿空隠す
 渋谷駅前の雑踏冬近し
 青空に遠く初冠雪の富士

坂本和穂

つり橋を猿渡りくる秋の空
 線路沿ひに猿が群れぬる猫じゃらし
 トンネルに退避所いくつ秋の昼
 猪口ひとつ買って新酒の試飲して
 末枯れの山吹の実の黒ぐろと
 一向に開かぬ踏切返り花
 寒菊の唯ひと群の庭の隅

佐藤稲子

鎌研いで坪刈をする稲田かな
 墓参りの閻魔堂前二重虹
 増反田に川の水引く十六夜
 朝顔の渾身の紺土蔵前
 小鳥来て楠に集へりぺちやぺちやと
 放棄田の草丈浮かぶ月明かり
 今年米を仕舞ふ蔵の戸重きかな

眞田忠雄

曼珠沙華背中合はせの墓のそば
 送電線その上ぜんぶ鱚雲
 草に座しファールのごと虫を聴く
 ふうはりとどんぐりの実が苔の上
 瀬戸内の檸檬と言はれ嗅いでみる
 葉書買ふ十一月の榛原で
 立冬のクロワッサンを買ひに行く

柴崎和男

炎屋に計報二枚の掲示板
名月や今宵の酒のことのほか
佳きことのありさうな日よ秋の雲
寝返りて猫抱きよせる夜寒かな
山粧ふ奥日光のその奥も
啄木鳥や高尾山中上り坂
杉箸の小気味よく割れ秋の宿

高橋均

青空に錦秋の壁那須連山
秋の空どこどこまでも秋の空
吊橋の揺るる足下紅葉散る
ポツクワリと走る花街初時雨
うとうとと畳の上の日向ぼこ
大根畑住宅街の一角に
冬の月吾を待つ君の影長し

高橋宜治

町工場は更地になつて鱈雲
秋彼岸墓に遺品の廃棄告ぐ
屋根を越え日差しの中へ秋の蝶
百年の柿の木を伐る古希手前
秋時雨解体を待つ父母の家
放れ駒の蹄の響き天高し
地下道が仄暖かし冬に入る

竹内文夫

刃物屋の店中狭し小六月
桐は実にテニスコートで乾く音
青空に冬の紅葉のひろがつて
自家用と誰にもわかる唐辛子
天辺に日の残りたる木守柿
地下足袋の跡新しき冬紅葉
落葉踏みめぐる寺領に水の音

中島和子

仏壇の水減る早さ今朝の菊
 夜の更けてふくらんでゆく虫の声
 小鳥来るてもとに凶鑑双眼鏡
 きりぎりすひとつ啼きあるバスの中
 紅葉狩昼餉のお焼きわけあひて
 焼きたてのマフィンとココア黄落期
 掘りあげし連なる藪を見せあふ子

貫井照子

山頂に倭建命碑天高し
 べた風のオホーツク海いわし雲
 秋の空鳩も鴉も風のま
 露天風呂のわきを登山者山もみぢ
 マスカットひと粒口に今日は晴
 秋霞羅白の山を遠く見せ
 監獄も観光コース秋深し

野口希代志

腕のびしままの起重機今日の月
 銀杏をひろふビニール袋の手
 啄木鳥や日は裏山の檜の木に
 段ボールの迷路は子らの秋祭り
 富士塚に芭蕉の句碑や天高し
 二千個をこゆるみみずくカフェの秋
 柳散る鯉はとろばで水脈を引き

萩原溪人

法事終へ茸コースの膳となり
 秋晴れの園に五台のベビーカー
 柿干して干してそのまま一ヶ月
 信濃路のコスモスみんな揺れてゐる
 実石榴の笑ひ出す頃実家へと
 秋深し最後のクラス会となり
 不安ある脚に早々掘炬燵

萩原久代

橋本 奨代

足の不調秋の夜長を持ってあまし
秋冷の朝一に行くブツクオフ
土日さけ久に外出秋日和
視野曇る眼科帰りの秋海棠
外階段に力尽きたる秋の蟬
一升の米粉を月見団子とす
再会を約せしままに秋彼岸

日高みち子

大凶のおみくじ引きし秋の空
玻璃戸越しに新蕎麦打ちを眺めぬる
里山へ抜ける小道の曼珠沙華
ギターの音下げて暗譜をする夜長
パパを追ひ抜き银杏落葉へ補助輪車
喧嘩して鍋いつぱいの大根煮る
占ひ師ポイントセチアを抱へ来る

濱野 新

秋空を鳶悠々と旋回す
さわさわと櫂並木の紅葉散る
懐メロを口遊みぬる小春かな
化粧して晴れ着の孫や七五三
秋日和平安神宮大鳥居
鴨川の飛石を跳ぶ小六月
身に沁むや元の上司の訃報来る

広瀬 済

赤とんぼ群れ飛ぶ中で野球して
赤とんぼ群れ来て球審タイムかけ
十数手碁盤読み切る秋日和
金木犀着物姿の運転手
買はれゆく風鈴の音微かなり
どの家やら香り芳し金木犀
蓑虫が顔を覗かす日和かな

◇1月・2月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
1月	4日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	6日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	6日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山 信行
	10日(火)	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	10日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	21日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	28日(土)	AM10:00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
	28日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
2月	3日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	3日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山 信行
	6日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	7日(火)	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	7日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	18日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	19日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	WEP俳句教室	丑久保 勲
	25日(土)	AM10:00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
	25日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

2月19日(日)の吟行。

集合 10時、皇居・大手門入口=パレスホテル前。

吟行地 皇居・東御苑の二の丸庭園の梅林など。

句会場 森下文化センター・第1会議室。

地下鉄・半蔵門線で大手町駅→清澄白河駅へ移動。

◎連絡先 秋山 信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733
 大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 丑久保 勲 ☎048-853-3856

秋 思 幼 秋 松 実 目 丸 近 昏 初 久 茹 秋
 鮭 ひ 子 の 茸 が を 干 き 時 鴨 々 で 空
 の 立 の 暮 の 七 や れ 干 き 時 鴨 々 で 空
 の ち 玉 れ 香 の つ ば し を り の は に 栗 の 屋
 皮 秋 入 虫 の り 嵐 土 手 根
 焼 雨 れ の 音 を 折 れ し 蔓 殊 沙 華
 直 止 を 絶 放 つ 一 栗 の 曼 殊 沙 華
 し ま 見 絶 放 つ 一 栗 の 曼 殊 沙 華
 も ぬ る え し 一 栗 の 曼 殊 沙 華
 う 旅 古 山 一 栗 の 曼 殊 沙 華
 一 行 の の 人 の 枝
 杯 く 秋 宿 鍋 枝 華

増田裕司

本郷美代子